小学校での取り組みを、中学校での支援につなげ、成果を出す

～ 小中のつながりある支援で不登校を克服した生徒の８年間の軌跡 ～

相模原市立星が丘小学校　**細川　恵**

Ⅰ　はじめに

Ａさんは中学３年生。１学期の欠席は修学旅行の３日間のみで、毎日元気に登校している。現在の心配事は半年後に迫った受験のことで、この夏休みは高校見学や塾での補習などに努力しようと考えている女の子である。実はＡさん、小学校では、その６年間のほとんどを登校せずに過ごした「不登校児童」だった。つまり、義務教育の中で**「完全な不登校」から「毎日登校できる」**に大きく変容した生徒である。奇跡にも思えるこの変容だが、決して奇跡的な出来事ではなかった。この変容の道筋には確かな軌跡がある。小学校と中学校の教師たちが「ねらい」と「想い」をもち、保護者とともに取り組んできた支援と、Ａさん自身の成長の軌跡がある。

Ａさんが６年生だった時、私は学区内の中学校の生徒指導主任を担当していた。その年の秋、小学校の先生と話す中で、Ａさんの存在と入学以来継続して支援してきた先生方の取り組みを知った。私は中学校生活の中で不登校を克服させることをねらいとし、次の視点で支援体制を組むこととした。それは、

・小中の支援のつながり
・保護者（母親）の支援
・本人の理解と支援、指導体制づくり

の３つである。小学校で温かな支援を受けてきたＡさんは「学校」も「先生」も好きなはず、保護者は先生を「信頼」しているはず、ならば、この視点を生かした支援を展開することで、中学校で不登校を克服できると考え取り組んだ。そして成果となった。

Ⅱ　Ａさんと母親

小学６年生までのＡさんと母親の様子、小学校での支援について簡単に記す。

１　手がかかる子どもと昭和の母

Ａさんは幼い頃から手がかかる子どもだった。乳児健診や予防接種では常に大きい声で泣いていた。人見知りも激しく、抱き方が少しでも変わると大泣きをした。年中から幼稚園に通うようになったが、母親から離れられないことが多く、年長の夏休み明けからは登園を渋るようになっていた。小学校入学後その状況は悪化した。入学式には参加したものの、翌日からは登校できなくなっていた。

・教室の友だちの声が嫌
・教室の臭いが嫌（特に給食の時間は嫌）

それが理由だった。中学３年生になった今も本人はその時の感覚をはっきりと覚えており、当時は外出しても色々な音が聞こえて辛かったと話す。町の中で、家の中で、「嫌な音がする。」と突然耳を塞ぎパニック状態になった。臭いに関しても同じである。多くの人が気にならない臭いも、Ａさんにとっては姿なく突然襲ってくる得体のしれない恐怖となっていた。母親はそんな我が子を前に「音なんてしていない！」「臭いなんて気にならない！」と叱りつけた。

・お尻をたたけばどうにかなる。
・音も臭いも言い訳をしているだけで、本人の甘え。だから許してはいけない。

そんな思いだった。近所の小学生が登校した後、家にいる我が子を見ると無性に腹が立った。登校できない我が子を見るのが嫌で、傷つけるような言葉を重ねた。厳しく叱れば何とかなると信じていた。信じたかった。母親はその頃の自分を「昭和の母」と表現する。優しくたくましく戦後を生き抜いた昭和の母には失礼だが、その言葉が最もふさわしいとその頃を振り返る。Ａさんの本当の姿から目をそらしていた。

２　小学校６年間の歩み（小学校の支援）

２年生になってもほとんど登校できずにいたが、担任と相談し放課後に登校するようになった。そうは言っても毎日とはいかず、週１回～３回程度不定期に学校に顔を出した。３年生になっても、同じようなペースで放課後に顔を出しながら２年間を過ごした。

４年生になった時に、担任より「放課後に算数か国語の勉強を４５分間やってみよう。」と提案され、週に１回程度放課後４５分の学習に挑戦した。不定期ではあったが、４５分授業というものを体験しながら１年間を過ごした。５、６年生でも期間が空いてしまうことはあったものの、放課後の学習は続いた。

Ａさんの振り返り

放課後、先生方が会ってくださったり、時々４５分の授業をやってくださったから、中学校で少しずつ授業に出られるようになったと思う。

３　昭和の母の気付き

２年生の定期健康診断で、尿検査が潜血となり、医療機関を受診する必要が生まれた。Ａさんは「音や臭い」でパニックを起こすため、病院が大嫌いでほとんど通院したことがなかった。母親は「手がかかる子ども」と思いながらも、これまで発達や発育について誰かに相談したことはなかったが、尿検査の結果をもって受診した小児科医に、登校できていないことを相談した。小児科医から心療内科のカウンセラーを紹介され、２か月後にカウンセリングを受け、その時に初めて、世の中には「音や臭いに敏感で、対応のしかたが分からずにパニックを起こす特性のある子どもがいること」「登校しない我が子を叱ってもどうにもならないこと」を理解した。一番困っているのは自分ではなく我が子であることにも気付いた。

・困っているのは自分ではなく我が子
・我が子の特性と向き合うことこそ親の役割

この気付きにより母親の気持ちは楽になり、登校するしないに一喜一憂することは意味のないことだと悟った。

この日より、６年生の５月に心療内科を受診するまで、母子のカウンセリングは続いた。

Ⅲ　３つの視点の軌跡
～支援の具体的な手だてと成果～

その特性から小学校では集団に適応できず不登校になっていたＡさんが、中学校では徐々に登校できるようになった。支援の具体的な手だてを本人の変容とともに振り返る。

１　小中の支援のつながり

（１）小中連携教育推進協議会と日頃の連携

相模原市内の各中学校区には「小中連携教育推進協議会」が組織され、年に６回程度協議会が開催されている。参加者は、中学校からは校長・教務主任・生徒指導主任、連携小学校からは校長・教務主任・児童指導主任、準連携小学校からは児童指導主任が一般的である。協議会の中では、学習面や生活面での情報交換が行われ、各校における児童生徒の健全育成を目指し話し合いが行われる。中学校で生徒指導主任を担当していた私はこの協

議会に参加していた。中学校区に於ける協議会は、これまでの勤務校でも当然開催されていたが、この学区の小中の間柄はこれまでとは少し違っていた。平たく言えば、職員同士の仲がとても良かったのである。協議会以外の場面でも、頻繁に情報交換が行われていた。「４年生のＢちゃんが２日間休んでいますが、中学生のお姉ちゃんは登校していますか」「登校していないＣちゃんを迎えに行ったらお兄ちゃんも家にいました」「Ｄさんが、問題行動を起こしました。小学校の頃はどうでしたか？」「Ｅさん部活動で活躍していますよ」など、職員室の会話の様に、些細なことでも連絡を取り合っていた。合同カンファレンスも様々なケースで行われ、小学校と中学校が常に報告・連絡・相談し合いながら、子どもや家庭を支援する関係にあった。

（２）小中連携教育推進協議会を機能させる

Ａさんが６年生だった１０月下旬にその年度３回目の小中連携教育推進協議会が開催された。その時に私は、その年度の４月に入学した生徒のうち、小学校５、６年生で不登校だった２名の生徒が中学校では登校できていることを報告した。その２名はいずれも入学前に保護者と私が面談を実施し、児童の様子や保護者の考えについて聞き取りを行った生徒だった。面談のきっかけは小学校の先生が私を保護者に紹介したことにある。協議会では、「入学前に保護者が中学校の教師と面談することは、不登校克服に意味があったのかもしれない」とその成果を喜び話し合った。その時である。連携校の児童指導主任からＡさんの話を聞いた。話の内容は、Ａさんの現状に加え、Ａさんの中学校生活を心配する先生の温かな気持ちで溢れていた。数日後、Ａさんの担任より私に連絡が入り、私は保護者と面談をすることとなった。

子どもたちの健全育成をめざし、小中が行事を通して連携することの意義や効果は既に知られているところだが、教師が日常的な会話の中でつながっていることもまた、大きな意義や効果を生む。なぜなら、生徒指導の効果をあげるためには、ものごとを冷静に判断する「客観的且つ合理的な体制づくり」と子どもや保護者の気持ちを想像し理解し寄り添う「想い」が必要だからだ。私は小学校の先生方との会話の中で、Ａさんの特性の概略を理解し、特性に応じた支援体制について考えることができた。

また、Ａさんに対する小学校の先生方の「想い」に触れたことが、入学前からＡさんの支援に取り組もうとする私の気持ちの大きな原動力となった。

２　保護者（母親）を支援する

Ａさんが６年生の１１月初旬、母親との面談を実施した。

面談のねらい

- 母親の不安感を軽減する。
- 小学校の先生方に対する信頼感を私たち中学校の先生たちにつなげる。
- 「中学校の入学式に参加させること」を保護者と私たちの共通の願いにする。

生活の大部分をともに過ごす母親の不安感は間違いなくＡさんに大きな影響を与える。

また、中学校の先生たちが信頼されるためには、私自身が信頼されることが先決である。これらを踏まえ、面談は母親の話を傾聴することから始めた。母親は、誕生から幼稚園、小学校入学から現在に至るまでの育ちと、中学校生活に関して不安に思っていることを、およそ３時間かけて、時折涙ぐみながらゆっくりと話した。母親とは初対面であったが、色々なことを話してくださった。これは、私が聞き上手だったわけではなく、母親が信頼する小学校の先生が、私のことを「細川先生なら何でも話して大丈夫ですよ」と紹介してくださったからだ。母親はＡさんのペースを

大切に、登校出来ないことを責めるのではなく、今出来る事を支援してくださる小学校の先生に感謝し、大きな信頼感を寄せていた。また、中学校入学を半年後に控え、中学校でもこのような生活が許されるのか、同じような生活を続けていて、高校に進学できるのか、そのようなことに大きな不安を抱いていた。話を聞いた後、私は母子の中学校生活に対する不安を軽減するために、そして、入学式への参加を目指し、家庭で行って欲しい支援と私が取り組むことについて話した。

母親に対する支援

『Ａさんを支援するために、家庭で取り組んで欲しいことを具体的に伝える』

母親に伝えた内容

・中学校でも小学校と同じリズムで生活できること。但し、中学校は放課後も部活動の生徒がたくさんいるので、通常の授業を１時間受けて帰宅することを目指すこと。
・本人の将来の夢と中学校生活を結びつけないで欲しいこと。「○○になるためには高校に行かなくてはならないから、学校は休んではいけない。」などとは絶対に言わないで欲しいこと。次の道は何とかなること。
・中学校が楽しみになるような会話をたくさんして欲しいこと。そのためには、お母さん自身が楽しみにして欲しいので、不安な時にはいつでも連絡して欲しいこと。
・Ａさんが中学校入学を楽しみにするようなしかけ（具体的な支援）を考えるので、一緒に作戦を実行して欲しいこと。

面談後の母親の変容

「中学校でも同じで良いんだ」「中学校でも先生に相談できる」と気持ちが楽になり、中学校に対し身構えをすることがなくなった。娘に不安をあおる話もしなくなり、入学式への参加が楽しみになった。

（母親の振り返りより）

３　本人の理解と支援体制づくり

（１）入学式への参加をめざし、中学校の支援をスタートさせる

①入学式前に手紙を渡す

２月に入ってすぐに新入生部活動見学会が実施された。欠席した児童にも部活動を紹介するパンフレットを学校を通して渡しているが、Ａさんには私からの手紙も加えた。

支援の具体的な手だて①

『中学校を身近な場所にする』

ねらい

・手紙を通して母親に私を紹介してもらう。
・中学校には、大好きな母親、信頼する小学校の先生と親しい先生がいることを認識させ、安心させる。

これは、母親との面談で話した「１つ目のしかけ」である。このことは小学校の先生にも母親にも話しておいた。手紙の内容は簡単なものだったが、母親には、「細川先生と会ったことがあるよ！」「こんな感じの先生だったよ」「細川先生はＦ先生（担任）やＧ先生（児童指導主任）や校長先生とも仲良しなんだって！」と手紙をきっかけに「私のこと」を話してもらうようにお願いした。

このことにより、Ａさんは中学校に母親や小学校の先生と親しい生徒指導の「細川先生」がいることを初めて認識した。

②入学式前に会って対話する

卒業式を目前に控え、小学校では卒業式への参加を目指し、放課後だけではなく、来室相談後、教室に立ち寄らせ、卒業制作に取り組ませたりと、Ａさんが友だちと学校にいる時間を長くするようにしていた。

私は児童指導主任の先生に入学前にＡさんと会いたいと相談した。「２つ目のしかけ」である。この頃には、保護者の了承を得る中で、小中の学校出張相談（青少年相談センター）の青少年教育カウンセラー同士の引継ぎも行わ

れていたので、双方のカウンセラーと相談し、「偶然に会う形」をとることにした。

支援の具体的な手だて②
『偶然を装い本人と会って対話する』
ねらい
・小学校の先生と親しい「私の姿」を見せることで「中学校で困ったらこの先生に相談できる」と、パニック時の具体的な解決策をイメージさせ、不安感を軽減する。

手だて決行の日時はＡさん母子が来室相談後帰宅する時となった。理由はカウンセラーがその時の様子を観察でき、必要な支援を入れることができるからだ。シチュエーションは校長先生に届け物に来た私が、帰りがけに帰宅途中のＡさんに偶然会うというものだった。私はまず小学校の校長室に潜んだ。校長先生と話しながら、わくわくしながらその時を待った。いよいよその時がやってきた。教務主任の先生から「相談が終わり出てきました」と聞き、私は校長先生と廊下を歩いた。校舎内の廊下でＡさん母子と出会った時に、校長先生が「相談終わったの？こちらは中学校の細川先生だよ。今日は校長先生にこの封筒を届けてくれたんだよ。校長先生と仲良しの先生なんだ。」と、いつの間にか封筒まで用意して私を紹介してくださった。母親は「お手紙をくれた細川先生だよ」と、カウンセラーは「私のお友だちの相談員さんが細川先生はとても楽しい先生だと話していたよ」と、続けざまに私を紹介した。私からは「こんにちは。中学校の細川先生です。宜しくね。」と出来る限りの笑顔で挨拶した。この時のＡさんの顔が、あまり緊張していなかったので、私は次の行動に出た。玄関を出て外を歩くＡさん母子に再び言葉をかけた。１１月の母親との面談でＡさんがおしゃれに興味があること聞いていたので「ピンクのお洋服可愛いね。先生もピンク大好きなんだよ。」と自分が着ていたジャージのピンクのラインを指差し、ピンク色の携帯電話をポケットから出した。小学校の先生方の協力を得て作戦は無事終了した。

それから数日後、Ａさんは小学校の卒業式に参加することができた。このことは、中学校の入学式参加に向けての大きな自信となった。そして、仲間にとっても大きな喜びとなった。小学校の先生方が育てた仲間のこの気持ちもまた、中学入学後の軌跡を支える大きな役割を果たすこととなる。

Ａさんはこの時のことを今でもはっきりと覚えている。

Ａさんのふり返り
手紙をもらったり、会ったことで、中学校の生徒指導の先生は怖いと思っていたけど、優しそうだなと思った。「困ったら細川先生に話せばいいんだ。」と具体的に考えられて安心した。

③入学式の１日をイメージさせる

入学式の前日、Ａさんの申し出で中学校の下見に来ることになった。私はこの時に「３つ目のしかけ」を実行した。

支援の具体的な手だて③
『入学式当日の流れをイメージさせる』
ねらい
・入学式当日の流れを理解させ、安心感を高め入学式に参加できる可能性を高める。
・前日に担任と会話する機会を作り、当日の「初めて」に対する不安感を取り除く。
・入学式に参加できたことを通し、自信を育み中学校生活への希望や意欲を生む。

式場になる体育館と教室を見学する途中で、私は式場内で準備作業をしている男性教諭に「先生、新入生が式場を見学しています。ご承知おきください。」と言葉をかけた。男性教諭は満面の笑顔で「どうぞ」と答えた。実はこの男性教諭こそ、翌日から担任になる教諭だった。入学式後、保護者は体育館でＰＴＡの役員決めが行われる。新入生は教室に引率

され、直ぐに学級活動の時間になる。教卓に立っているのは私ではなく担任である。翌日の時程を説明しながら、教室に行き、Ａさんが座る予定の座席に着席させ、教卓では私ではなく担任の先生が話していることを説明した。そして翌日、Ａさんは無事入学式に参加することができた。

Ａさんのふり返り

入学式で先生方の顔を見た時にはとても安心した。学活の時に、廊下からの細川先生の視線に気付き、「困ったら細川先生に話しなさい。」と母に言われたことを思い出したので不安はなかった。

（２）中学校生活のスタートと様々な支援

①本人のペースを尊重する

Ａさんの新生活がスタートした。予定通り、午前中１時間程度参加し下校することから始めた。その日の予定は担任の先生と本人（母親）で確認した。入学前に私がＡさんと交流を深めた理由は、不安感を取り除くためだけではなかった。私への安心感が高まれば、私と親しく話す学級担任への安心感も高まると思ったからである。私が担任と会話する様子も、意識して見せるようにした。入学後、２学期頃までは、午前中で下校することがほとんどだった。少しオーバーワークになると、母親から「今日はコントロールで欠席します」と連絡が入り欠席した。順調に登校できていた我が子が「休みたい」と話すと、親心として「ここで休ませたら元に戻ってしまうのでは…」などと不安がよぎり何としても休ませたくないと思うものだが、Ａさんの両親はあくまでも本人のペースを大切にしていた。大きな音が苦手なので、体育祭には参加しなかった。一進一退、そんな日々を過ごしながら中１の２学期は終了した。

このような生活の中で幾度となく問題が発生した。それは、他の小学校から入学した生徒からの「あの子はなぜ途中で帰るの？」と言う疑問の声と、体力に自信がないＡさんが体育の授業を毎回受けないことに対する非難の声である。生徒たちに「他を認め、受け入れ、ともに歩く」心の育成が必要になった。

②仲間の理解を得て、仲間の心を育てる

支援の具体的な手だて④

『Ａさんと保護者の承諾を得、小学校時代のことや特性について、仲間に話し理解を得る』

生徒に伝えた内容

・Ａさんは小学校の時に、ほとんど登校できなかったが、小学校の友だちや先生はいつもＡさんを応援していて、卒業式には参加することができたこと。それはＡさんにとっても、友だちにとっても、先生方にとっても、嬉しいできごとだったこと。

・Ａさんの目標は学校に毎日登校できるようになることで、これは、これまで応援してきた小学校の先生や友だち、家の人、みんなの願いでもあること。私たちもその気持ちを引き継いで応援していきたいこと。

・途中で下校したり、体育を見学したり、それは逃げたり後ろに進んでいるわけではなく、前に進むために必要なプロセスであること。そこを理解するのは難しいとは思うけれど、そう言う状況であることは知っていて欲しいこと。

仲間の反応

「理由が分かったのでもう言いません」（他校卒業生）「中学校の卒業式も一緒に出たいから、これからも応援します」（同じ小学校の卒業生）

説明することで子どもたちの行動は変わる。これが中学生である。この後もＡさんの行動に疑問を抱く生徒が時折見られたが、その都度、Ａさんをよく理解している生徒が説明したり、疑問を抱く生徒たちの思いを私や担任が受け止め、話したりを繰り返しながら、Ａさんに対する理解が深まった。他の生徒たちの心も成長し、いつのまにかＡさんの行動は特別なものではなくなった。

（３）飛躍的な成長

中１の３学期、本人の気持ちに「お弁当を食べて午後も学校にいたい」と言う大きな変化が生まれた。初めてのお弁当は、小学校からの友だちと私の３人で相談室で食べたが徐々に教室で食べられるようになった。

２年生に進級すると、午後までいられる日が少しずつ増え、６月には東京校外学習にも参加できた。班の仲間と満員電車に乗車し見学場所に出かけた。帰りは迎えに行った母親とひと足先に帰路についたが、様々な臭いも街中に溢れる特別な音もクリアしながら校外学習を終えることができ、大きな自信を得た。２学期には体育祭にも参加でき、１１月には男子生徒とともに自動車販売店への職場体験に３日間休まずに通うことができた。つなぎを着て嬉しそうに自動車修理の真似事を行う姿は、訪問した教諭を驚かせた。

（４）インクルーシブな授業

支援の具体的な手だて⑤

『インクルーシブな授業を実践する』

ねらい

・適切な課題を与えることで学習意欲を高める。

・学びを深める姿を仲間に示すことで、仲間に刺激を与え、ともに学び育つ集団へと育てる。

２年生になり全ての教科を受けられるようになったが、６年間の大部分を家の中で過ごしたＡさんは体力がほとんどなく、１年次には体育の授業を見学して過ごした。夏や冬は活動場所に移動することもできず、教室や保健室で過ごすことが多かった。２年生になり少しずつ体育の授業に参加するようになったが、体力がないので、準備運動で走るランニングで相当の体力を消耗してしまった。生まれて初めて５０ｍ走を全力で走った時には、ひどく疲れた様子だった。この様子を見て、私は、ＡさんにはＡさんの学習課題を与えるようにした。例えば、持久走では他の生徒が１０００ｍ走る中、本人に距離を決めさせて挑戦させるなどだ。初日、仲間からの声援を受け２００ｍを完走した。Ａさんの学習カードは達成感で溢れていた。距離は異なるが学びは他の生徒と何も変わらない。走る距離は少しずつ長くなっていった。

Ａさんのふり返り

体育はずっと苦手だったけど、目標を達成することが嬉しくて、次から次へと目標を持つことができた。３年生になってハンドボールの授業に全部参加できた時には本当に嬉しかった。

（５）皆でかかわり、自分の力で歩ませる

２年生の修了式後に行われた退任・離任の式、私は壇上に座っていた。春休みにＡさん親子がお別れの挨拶にきてくれたので、Ａさんの成長を喜ぶとともに、小学校からこれまでの色々なしかけについて種明かしをした。Ａさんは明るく笑いながら、これからの目標について話してくれた。そこには、私が異動することへの不安感は全くなかった。これこそ、私がずっと取り組んできた大きなしかけの成果である。

支援の具体的な手だて⑥

『自分の力で歩ませる』

ねらい

・自分で力で歩ませ、卒業後の人生で、困難に出会った時に、自らの力で解決し、次の道を切り拓いていける力を育てる。

私はＡさんのことを一人で抱えることはしなかった。常に担任を窓口に関わる職員全員で見守るようにした。そして、悩んだ時には救うのではなく、どうしたいのかを尋ね、自分の力で前に進ませた。３年生になった今Ａさんは「色々なことの解決の仕方が分かったので安心です」と話すようになった。生徒指導のねらいは子どもたちに「生きる方法」を身に付けさせていくことだ。

Ⅳ　おわりに

Ａさんは小学校と中学校のつながりある支援のなかでゆっくりと変容し続け、不登校を克服した。もちろん、不安を抱えながらも、焦らず見守り続けたご両親の存在も大きい。この軌跡の中で改めて感じたことがある。

１　日々の中での小中のつながり

「Ａさん変容の要因は小学校と中学校の支援のつながりに他ならない」私はつくづくそう思う。Ａさんは６年間不登校だったが、放課後の学習を通し、小学校の先生方に対する信頼感を育ててきた。「先生は信頼できる」この気持ちは、私たちに対する信頼感へとつながり、中学校での指導効果をあげた。

話は少しそれるが、それは問題行動をくり返す生徒が立ち直る過程でも感じてきた。どのような生徒も、自分の丸ごとを理解してくれていた小学校の先生が大好きだ。日常会話の中で、彼らのそのような想いを常々感じてきた。彼らもまた「先生は信頼できる」そんな瞳で私たちを見つめ、私たちの指導に小学校での学びを乗せる。より純真な小学校時代に見せていた本来の姿や、その頃の家庭や学校での様子を先生方から聞き、個に応じた支援を展開したことで、変容した生徒をこの中学校区で数多く見てきた。そして子どもたちの成長を喜び、「中学校で育ててくれてありがとう」と、感謝してくださる小学校の先生方と、心からともに喜び合ってきた。

中学教師は小学教師と話してみよう。きっと「困った子だな」と言いながらも、可愛くてたまらないと言う表情と出会える。その表情は、課題を抱える生徒を「大人になりつつある可愛い子ども」であることを再認識させる。可能性で溢れた彼らの未来を想像させ、支援の方法を具体的に考える機会を与える。

２　特性の認識はゴールではなく始まり

Ａさんは集団の中で自分が苦手とすることを「それが私らしさだと分かれば、混乱せずに対応ができるようになった。」と話す。情報化社会の中、私たちは様々な知識を得、何か課題があると医療機関の受診を勧めることがある。それはとても大切なことであるが、ともすると診断がゴールになってしまう。その子どもの特性を理解したら、その特性を集団の中で生かすための手立てを考えよう。そうすることで診断は全てのスタートになる。私たちの手だては、特性を持つ子どもも周囲の子どもも成長させ、やがては配慮をしなくても平常な生活を過ごせるようになる。Ａさんの変容を通し改めて感じた。

３　人の育ちは連続している

教師が一生懸命支援していても、なかなかプラスへと変容しない子ども（児童・生徒）がいる。それどころかマイナスへと退行している様に見える子どもがいる。そんな時に、教師は大きな無力感を感じるが、その場その時に一生懸命支援（指導）したことは、必ずやその子どもの未来につながる。そんなことを感じた。小学校で結果が出ずとも中学校で結果が出る児童がいる。中学校で結果が出なくてもその先の人生で結果が出る生徒がいる。これは全ての課題に同じことが言える。彼らの人生は校種によって切れていない。彼らにとって私たち教師は皆「自分を育ててくれた先生」だ。人の育ちは連続している。だから、教師の支援も連続している。効果が現れる時期がいつになるのかは誰も分からないけれども、未来に生かされることは確かである。

私は小学校に異動した。自治活動で学年を創造する教師がいて、子どもたちの気付きで学習をつなぐ教師がいる。学校のことを知り尽くす教務主任がいて、児童指導に奔走する児童支援専任教諭がいる。そして温かく見守る校長がいる。ここは中学校現場と何も変わらない同じ教育現場だ。これからは児童の育ちをつなぐ側として中学校とつながりたい。